

2023 年度学位記授与式 式辞

神戸松蔭女子学院大学
学長 待田昌二

皆さん、ご卒業おめでとうございます。心からお祝いを申し上げます。本日もご列席いただきましてご家族の皆様に対しましても祝意をお伝えいたします。

この 4 年間、私たちは平和な日常ということを考えざるを得ない状況に直面してきました。今年の 1 月 1 日には能登半島沖を震源とする地震が発生し、北陸地方を中心に広い範囲に大きな被害がありました。卒業生の皆さんの中にも被害を受けられた方や、親族・友人が被災されたという方がおられることと思います。被害を受けられた方々にあらためてお見舞い申し上げます。

能登半島地震と名付けられています。近畿地方でも場所によってはかなり揺れましたので、日常を一瞬にして失ってしまう恐ろしさを、多くの方が他人事ではない事態として感じたと思います。大きな地震が起きた時に国や地方自治体が迅速に対応できるよう準備することに加えて、各自の備えの必要性をあらためて強く感じました。

2022 年 2 月に起きたロシアによるウクライナ侵攻では、戦争によって平和な日常が失われるという状況を、報道を通してほぼリアルタイムに知ることとなりました。侵攻直後には 1 千万人という人たちが戦争という理不尽な暴力によって家を離れ、避難生活を強いられました。2 年以上経った今もウクライナでの戦争が続いていることに愕然とします。しかも、戦争や紛争はウクライナ以外でも絶えることなく起きており、パレスチナのガザ地区のようにさらに過酷な状況に置かれている人たちもいます。

そして、この 4 年間の出来事の中で、我々の日常に直接大きな影響を与えたのは、やはり新型コロナウイルス感染症です。4 年前の 2 月に、当時の安倍首相が感染拡大防止のため小学校から高校までの臨時休校を要請し、3 月 2 日から実際にほとんどの学校が休校する事態となりました。

キャンパスにおいて、学生・教職員が親しく声を掛け合いながら学ぶのが本学の特徴ですので、4 月からの授業をすべて遠隔で行うなどあり得ないことと私は考えていました。しかしながら、外出の制限が要請される中、入学式を中止して新年度の授業開始を延期し、遠隔授業として実施することを決定せざるを得ませんでした。なんとか遠隔授業に対応しようと努力はしましたが、我々自身も行動制限がある中、試行錯誤しながらの授業の提供となってしまいました。たいへん申し訳ないことであったと思います。

皆さんは、キャンパスでの学びだけでなく、留学やクラブ・サークル活動、アルバイトなど様々な経験をする機会を奪われることとなってしまいました。さらには、皆さん自身があるいはご家族が感染症に罹ってしまったことで、たいへん苦しい時期を過ごされた方も多くおられることと思います。この特別な 4 年間を乗り越えて新しい道に進もうとされている皆さんに、心

よりエールを送りたいと思います。

このような日常を揺るがす事態が起きた時に、今常に喚起されているのが、ネット上の誤った情報への注意です。もちろんインターネットが非常時において不可欠な存在であることは明らかです。新型コロナウイルス感染症により不要不急の外出を控えるよう要請され、家に閉じこもることを余儀なくされましたが、皆さんは家族や友人とのつながりを保てましたし、必要な物を取り寄せることもできました。また、私たちも皆さんにオンライン授業や様々な情報を届けることができました。

一方で、インターネットには、新型コロナウイルスやワクチンについて情報や意見が数多く飛び交っており、その中には、わざと間違った情報を流している場合があります。しかも、偽の画像や映像を作って流す場合さえあります。私たちは、画像、ましてや映像であれば直感的に信じてしまいます。画像や映像の加工技術自体は昔からありましたが、労力と時間をかけて作成する必要がありました。しかし今は、人工知能（AI）の進歩により、写真はもちろんのこと、実在しない映像、例えば政治家が実際に言っていないことを言ったように見せる映像を作ることさえかなり簡単になってきました。

これからは、ネットに上がっている映像を見ても、それが実在のものかどうか常に疑うようになるでしょう。すでに私たちはネットの写真について、それが実物通りであるとは思わなくなっています。以前なら専用のプリクラ機でしかできなかったような顔のパーツの修正が、今やスマートフォンで簡単にできるようになっています。顔が写っている写真がネットにアップされた時に、それが実物をもとにしたものであることを疑わないとしても、何の修正もされていないとは思わなくなっているのではないのでしょうか。

もはや顔写真は、実物を伝える手段というより、修正が入っていることを承知で見えるもの、あるいは修正自体を楽しむものとなりつつあります。これからは、動画も同じように見られるものとなるでしょう。すなわち、多少誇張なり修正されたものとしてみるということです。すでに私たちはコマーシャルフィルム（CMの映像）を、真実をそのまま伝えるものとして見ていません。普通の人々が撮影した動画も、コマーシャルフィルム化していくことができるかもしれません。見て楽しければよいと捉える人もいるでしょうが、情報の信頼性が低くて信用できないと捉える人もいるでしょう。

この情報の信頼性という問題は、ほぼすべてのコミュニケーションにあてはまる古くからの問題です。例えば皆さんは、自由自在に泣いたり笑ったりできるでしょうか。私たちは、人前で泣かないようにしたり、嬉しくもないのに笑ったりします。しかし、完璧にコントロールできるわけではありません。泣きたくないのに泣いたり、笑わないようにしようとしても思わず笑ってしまうことがあります。完璧に表情をコントロールできたら、他者に良い印象を与えて思い通りの人間関係を築けるように思えます。

私が担当している「対人コミュニケーション論」という授業で話していることですが、泣いたり笑ったりという基本的な表情は、感情を他者に伝える手段として動物から人間へと進化する中で獲得されたものです。悲しい時に泣き、嬉しい時に笑うのは世界中の人類に共通しており、

人類が生まれながらに持っている性質です。

子どもの頃は生まれ持った性質そのまま、感情の通り表情に出してしまいます。しかし、人間が他の動物と違うのは、成長とともに多少は感情表出をコントロールできるようになる点です。とはいえ、完璧にはできません。感情表出をコントロールできる人の方がうまく生きていくことができるなら、そのような人がどんどん増えていき、人間は感情表出のコントロールをもっとうまくできるように進化するように思えます。そうならなかった理由は、感情表出を完璧にコントロールできる方が生きる上で実際には有利とは限らなかったためでしょう。悲しくなくても自在に泣けて、本当は全く嬉しくない時にも笑える人がいたら、次第に周囲の人はその人の泣き笑いを信用しなくなるでしょう。すなわち、情報の信頼性が失われ、表情がコミュニケーションの役割を果たさなくなります。

私たちはしばしば、ある感情にとらわれてしまいます。愛情であったり、友情であったり、時には妬みや怒りである場合もあります。また、失敗の後悔や他人に迷惑をかけて申し訳ないという気持ちをいつまでも引きずってしまうことがあります。それらの感情をすぐに忘れられたり、気分転換できたりすればよいと思うのに、簡単にはできません。しかし、そういったいわば不器用さが、その人の信頼性を高めていると言えます。感情をすぐに変えることができたり、考えをすぐに変えてしまう人を信用することはできません。

ネットでの情報の氾濫と AI などによる情報を加工する技術が進展する中で、どれが信頼できる情報なのかを見極める力をこれからも養ってほしいと思います。それとともに、信頼できる人間とはどんな人か、自分自身は他者からみて信頼できる人間なのかも考え続けてほしいと思います。

新型コロナウイルスの感染拡大が始まった 4 年前に授業を全面オンラインで始めることとなりましたが、行動制限が緩和された時期にはできるだけこのキャンパスで対面授業をするようにしました。実際に対面してのやり取りには、動画では伝わらない多くの情報が含まれているからです。そこには、微妙な気持ちの変化を感じ取り、感情を伝えあうことも含まれています。人と人の出会いは、葛藤や苦しみをもたらすこともありますが、安心や喜びといった人生にとって不可欠の感情をもたらします。

そして私たちは同じキャンパスにいることによって、周囲にいる人たちの姿や話し声、建物や木々、六甲山麓の空気、六甲山や神戸の街と海の風景などを共有しています。私たちの記憶は、感情や場所と結びついています。感情や場所に彩られることのない出来事は記憶にあまり残りません。長い時間をかけてキャンパスまで通った方も少なくないと思いますが、神戸松蔭のキャンパスでともに学び、様々な経験をして、感情と場所を共有することはとても大切に意味のあることだったと思います。

皆さんが再びこのキャンパスを訪れ、ともに過ごした日々について語り合うことを、教職員一同楽しみにしています。

皆さんのこれからの健康と活躍を心より祈念しています。